### うつ病の 起源から 未来医療へ

## 講演3

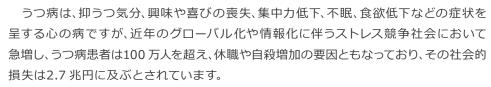
# 「うつ病の現状と脳科学研究の応用」

山脇成人(やまわき しげと)

(広島大学 大学院医歯薬保健学研究院 教授)

### ポイント

- うつ病は休職や自殺の要因ともなっており、社会的損失の大きい疾患です。
- うつ病の原因は様々ですが、最終的には脳機能の不調により症状が出現します。
- 脳科学研究の成果を応用して、うつ病の客観的な診断法や 治療法を目指しています。



がんや糖尿病などの身体疾患と同様に、うつ病も早期診断、早期治療が重要ですが、一時的な抑うつ状態との区別が困難であり、患者はうつ病としての自覚が乏しく、適切な早期診断がなされていません。典型的うつ病は中高年に好発し、病前性格としては、几帳面、責任感が強い、自責的傾向が挙げられていますが、最近では自己愛的、回避的、他罰的傾向の若年者に好発する典型例とは異なる、いわゆる新型うつ病(医学用語ではない)が増加していると言われています。このようにうつ病の概念はいまだ曖昧な部分が多く、客観的な診断法の確立が求められています。

ヒトは他の動物とは異なり、言葉や道具を用いて高度で複雑な社会を形成し、競争社会を生き抜くと同時に、社会のルールを作り、本能的欲望をコントロールしたり、他人の気持ちを理解するなどのいわゆる理性を保つために、大脳皮質 (特に前頭前野)が発達しました。近年、脳科学研究の進歩は著しく、MRI などを用いた脳機能解析研究により、喜怒哀楽などの情動を制御メカニズムなどが解明されつつあります。

情動は、脳の深部にある扁桃体などの大脳辺縁系が密接に関与しており、前頭前野を含む神経回路(セロトニン神経、ドーパミン神経など)がコントロールしています。昨今のストレス状況は、この情動制御に関与する神経回路の不調を引き起こし、結果として、うつ病症状を引き起こすと考えられます。

本講演では、私たちが進めるうつ病に関する脳機能解析研究を紹介するとともに、これからのうつ病医療における脳科学研究の応用について私見を述べてみたいと思います。



略極

1979年広島大学医学部卒業。 1980年国立呉病院精神科医師。 1982年ワシントン大学留学(科学技術庁在外研究員)、1985年広島 大学より医学博士号を取得(医学博士)。国立呉病院精神科医長を経て、1990年より現職。

#### メモ



